

滝の千年ツバキ

滝のツバキとは、かつて滝と呼ばれていた地域にあるツバキがその名前の由来となっています。これは、現在一般的な観賞用の種類に先行する、野生で見られるツバキの貴重なサンプルとなっています。現在のツバキに比べ滝のツバキの花は少し小さく、黄色い中心を囲む深紅色の花びらの単層の構造となっています。木は通常は3月から4月の間に開花しますが、開花の正確なタイミングと開花量は気候などの要因によって異なります。

木の中心と年輪の多くが朽ちているため、滝のツバキの正確な樹齢はわかりません。木の周囲（3.26m）の長さより、樹齢は500～1200年であることが推定されています。明らかなことは、この場所のおかげで何世紀にもわたって残ってきたということです。木の下は頑丈な岩盤は滝のツバキを地滑りから守り、周囲には放棄された田んぼが点在していますが、この場所は地元の人々が耕作を行うには勾配が急すぎたのです。さらに湿度が高く部分的に日陰になっている森は、この滝のツバキにとって理想的な育成条件を提供しているのです。

滝のツバキは1989年に京都府指定天然記念物に指定され、現在も手入れの行き届いた状態になっています。木の下は石の足場で強化されており、樹皮は保護用の革のシートで覆われ、木製の支柱が重い木の枝を支えています。

滝のツバキの近くには数十種類の椿のある庭園と、椿の花の形をした屋根で有名な、加悦椿文化資料館があります。